

光りのスペイン

画面の拡大・縮小,全画面（ブラウザ）などで見やすくご利用ください

はつくつ文庫

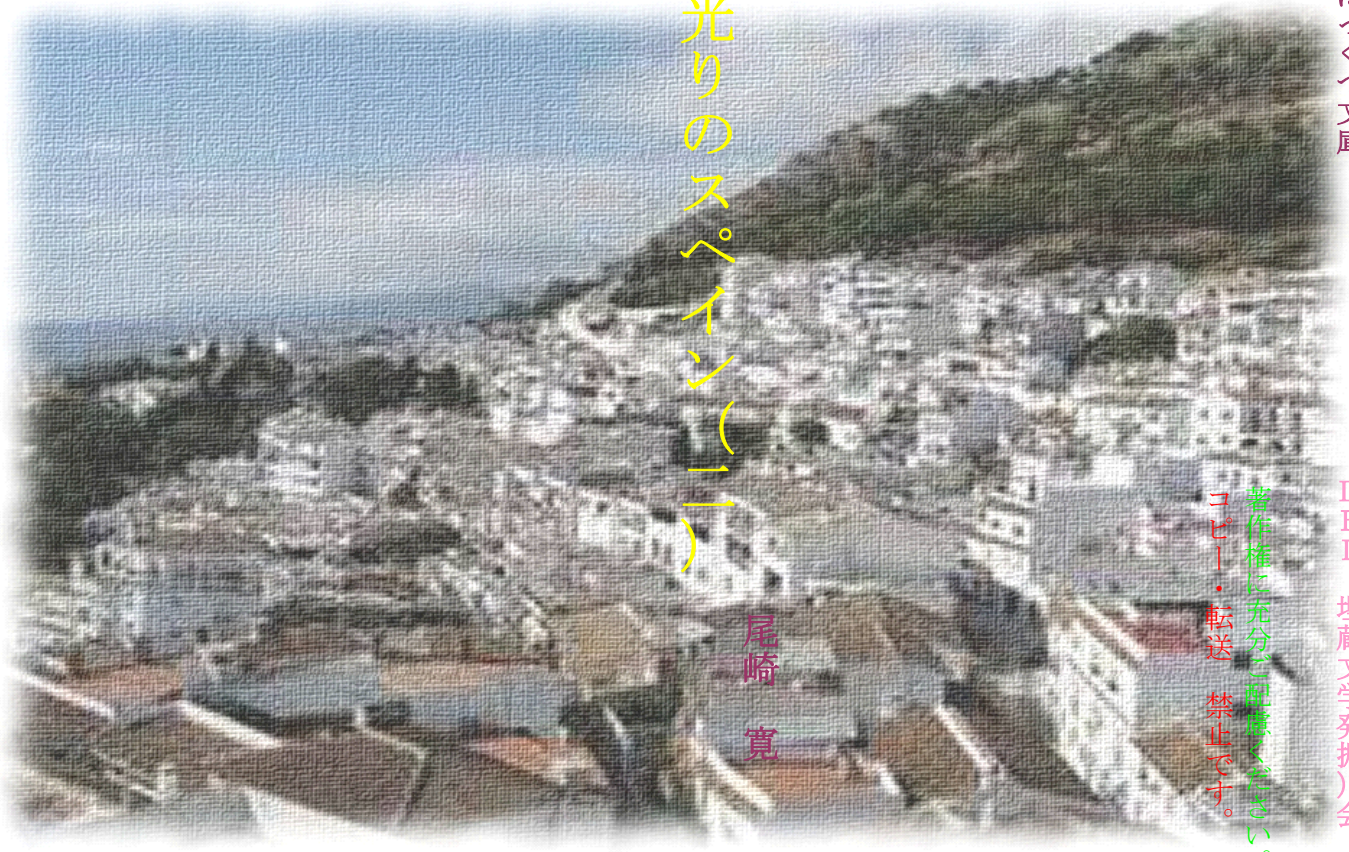
光りのスペイン（二）

尾崎 寛

著作権に充分な配慮をください。
コピー・転送 禁止です。

DBL（埋蔵文学発掘）会

戻り⇒ブラウザ（矢印など）で



次の日から一週間に俺の会社の倉庫は、返品の手でふくれあがっていた。以前から思わしくなかった営業成績をあげるため、この夏に過大な宣伝費をかけて翻訳物を出したが、これが全く売れなかった。銀行でも冷くあしらわれ倒産の噂さえ流れ始めていた。誰の表情も暗かった。

その一週間に俺はママの説得に通った。山本は相変らず新橋に日参していた。話しをもちかけて丁度一週間目の夜、以前のスナックでママと会った。「いいわ、そこまで言うのならまかせるわ」とうとう同意した。「でも慎重にやってね」それから細かい打ち合わせをした。勧誘してから実行まで極力短時間がいい。警察に漏れる時間を無くするのが第一だが、警察以上にヤクザに漏れるのが怖い。もしやつらが嗅ぎつけたら、こんな稼ぎかたはやつらの領分だから、それこそどんな無理難題を押し付けてくるか、想像さえしたくない。へたをすると、明日には俺は東京湾に浮いてるかもしれない。普段でも、それらしいやつらが店へやって来て様子を覗いているし、実際に「困ってないか・俺達がガードしてやる・」という話しは、しょっちゅうある。安全に勧誘できる客は、ママと綾子にしか分からないのだ。「何日あれば二十人集るかな」「三日あればなんとかなるわ」「明日の晩から始めたとして、四日目だとちょうど土曜日だな」

日時は今週の土曜十時から。場所は赤坂。勧誘はママと綾子だけがやり、店の女たちにも緘口令を敷くこと。「それから時々お巡りが来るだろう」「ええ、むこうも仕事だから、いちおう顔を出すていだけけど」「今日明日中に交番と所轄へなにか届けておいたほうがいいな」「そうね、じゃ明日時候の挨拶として行ってくるわ」一応まとまった。後は山本と綾子に何と云うかが問題だった。今夜中に綾子には話しておかなければならない。ママと別れて俺は赤坂へ向かった。車の中で、一体どう言ったらいいものか俺は迷った。

赤坂へ着いたのは十時頃だった。桐島が立っている。彼に最近警官が来たかと訊くと、ここ二週間ばかり来てないからそろそろ危ないですよ、と彼は言った。中へ入ると有難いことに客は来ていなかった。綾子をつかまえて、誰よりも先に相談をもちかけるような顔をして早速用件に入った。綾子も驚いた。「ここで！このお店でするの？・・・だって、ママが許さないわよ。絶対ないしよじやできないもん」「もちろんママが許可したとしてだよ…綾ちゃんは協力してくれるかい」暫く綾子は考えこんでいたが、ふふと笑うと、「どうせだめなんていわせないでしょう。いいわ、協力するわ。でも、そのお金で何をするつもりなの」綾子に少し嘘をついている負目が、俺の目的を話させた。「外国へ、スペインへ行

こうと思ってる」「スペイン？なんのために？」「別になにをしに行くわけでもないんだけどね。とにかく行きたいんだ」「そう、わたしも連れてってくださる？・・・ふ、ふ・・・じょうだんよ」

フィルムの手配も終わっていたし、計画どおり動きだしていた。残された問題は山本だった。山本と俺は何でも一緒にやって来た。だが、こんどは別なのだ。彼は何と言うだろう。十二時になるとママと山本がやって来た。「アヤちゃんに話した？」ママが訊いた。「納得してくれたけど、ママも知らないことになっているから頼むよ」「山ちゃんには？」「あとで話そうと思ってる」

「ところで、この前の話しだけ・・・」俺は、もうひとつの関心に話題を換えた。綾子のポーチだ。綾子に限らず、どこの店の女も必ず小さなポーチを持っていて、席を交代するときなど肌身離さず持ち歩く。化粧品や緊急に必要とする物が、入ってるらしい。そして、客がそれに触るのは、まして中を覗くなど絶対許されない。一番危険なパンドラの箱なのだ。だから俺もポーチに興味を持ったことはない。言われれば、綾子はドレスの色にあわせポーチも替えてるような気がする・・・と、思う程度だ。「今日の綾ちゃんのポーチでも、ママの『なぞなぞ』は、解けるのかな？」「もちろん

んよ」ママの目がいかにもうれしそうに笑ってる。今日も最初からそれとなく観察したのだが、特になにもない。やっぱブランド物で、高価なものなんだろうな、と思うくらいだ。「ま、せいぜい悩みなさい」とますますママは、たのしそうだ。

その晩三時に店を出てママを降し、山本と二人になったとき俺は切り出した。山本はすぐにのってきた。とにかく、何であれ事件さえあれば喜ぶ男だ。彼は金の使い道までは訊かなかった。最初から最後まで何をするにも一緒に、まさか俺が別行動をとるとは思わないから、敢て聞こうとしなかったのかもしれない。話しの後で彼の結婚のその後の状態を聞いた。「駄目さ」と山本。「駄目で、どういうことだ」「はつきり駄目になったよ、それに式をあげるにしても文無しだぜ」俺は何と言っているのか判らなかった。下手ななぐさめは言わない方がいいと黙っていた。俺と山本は夜の中に残り残されたような気分で、それぞれに出口を捜していた。

二日後の夜俺は赤坂へ行った。カウンターにかけると遠ちゃんと言った。「フィルムやるんですってね」「うん。遠ちゃんにも迷惑をかけて、もうしわけないな。料理をよろしく頼むよ。見せかけでごまかせる連中じゃないからいいものを、な。とにかく、まかせるよ」「はい。ところで一つお願いが

あるんですが」「なんだい」「うちの奴なんですけどね、一度も見たことがないから見てみたい、て言ってるんですよ」「いいじゃないか、連れてくれば」「そうですね、すみません」話しをしていると綾子が来た。俺はちらっとポーチを見た。

ポーチの件が未解決のままだった。ママに「悩みなさい」と言われた次の日、昼休みに会社の屋上で缶コーヒーを飲みながら考えた。ポーチの中身は関係ないにきまつてる・・・外観で分かることがなにかある。それに、多分俺に関係あるなにか、だ・・・外観で俺と関係ありそう、といっても見当がつかないが、ママにはすぐに分かった・・・綾子のポーチは毎日違う・・・それでも、外観で解る?・・・つまり、ポーチは変わっても、変わらないなにかがあるということ・・・か? コーヒーを飲み終えるころには、答えは解らないが、なんとなく方向が見えたような気がした。いまポーチはソファアの上、綾子の脇にある。幸いなことに、俺から近い。綾子は俯いて、水割りを作るのに集中している。真っ白なエナメル地に金の留め金、短い金のチェーン、そして、裏に隠れるように小さなピンク色の造花・・・どこと違って変わったこともない。「どうしたの、ぼーっとして。はい、どうぞ」コップがコースターの上に置かれる。「ああ、ごめん。ちょっと考えごととしてた」勧誘客の集り具合を聞くと十五人ほどだと言う。

新橋へ電話しようと思ったが、やっぱり自分で行こうと思いつき、綾子に「ちよつと行つてくる」と車を拾った。なにかが、閃いた。ポーチ本体を加工したりはしない。となれば、くつついている物だ。・・・ピンクの造花。

赤坂では客は静かに飲んでいるが、こちらは騒いだ方が得だといわんばかりに陽気だ。「いま山ちゃんに話してたところなんだけどね」ママがビールをつぎながら言った。「ロボートを知ってるでしょう」

ロバートは、米国海兵隊の中尉だった。以前から日本へ来るとこの店へ顔を出し、ママとは古い馴じみらしい。俺も何回か会ってるし、ママと二人一緒に飲みに行ったこともある。鍛えあげた大きな体に赤ら顔で、いかにもアメリカ人らしい陽気さを備えたいい奴だった。家庭では、いい父親だろうなと俺は思った。大学で経済を専攻し国の研究機関で働いていたのだが、兵役でベトナムへかり出された。四十歳位に見えたが、あるいはもつといっていたかもしれない。会話は、彼の不確かな日本語と俺のもつと怪しい英語だった。半年に一回日本を訪れていた。

「ロバートがね。きのう来たのよ。そして、最後に、『マササン。オ別レデス』て言うのよ。どうしたのてきいたら、

『ベトナム、行キマス、モドレマセン』で「ママは俯くと目頭をおさえた。いつだったか、一緒に飲んでいて、可成り酔った時に俺は彼に言った。

「Have you been in vietnam」すると彼の陽気な顔が曇った。「Yes」と短く彼は答えた。俺は悪いことを言ったと思った。あのときのロボートの憂鬱で悲しげな表情を俺は思いだした。「あのロボートがベトナムへ……」新聞が伝えるベトナムの戦禍は激しさを増していた。ロボートが銃をさげ硝煙と泥の中を這いずりまわっている姿と、彼の見せてくれた家族の写真が一緒に浮かんだ。俺は胸がつまる気がした。帰ってこいよ、どんなことをしても帰ってこいよ、俺は心の中で叫んだ。ママも山本も同じ思いだったのだろう。暫くはママの涙をすすする音だけだった。「どうしてなんでしようね。あんない人が戦争に行かなきあいけないなんて」だが、事実は、その後一年経っても彼は姿を見せなかった。「いやね、世の中で悲しいことや嫌なことばかり。どうしてなのかしら、みんな仕合せになりたいと思ってるはずなのに。……さあ、もうよししましょう、考えたってどうなることでもないわ」

その夜、再び皆で赤坂へ行ったが、心のどこかに鉛の錘をさげているようで気分が晴れなかった。ロボートの、テレ

ビのホームドラマに出るような、典型的な優しい父親の顔が離れなかった。気のせいか、遠雷のように爆音がたえず鳴り続けているのが、耳の底に響いた。

土曜日。俺はアパートから八ミリ映写機とスクリーン、それにフィルムを運んだ。取りつけは簡単に終わった。「万一警察にふみこまれたらどうします」遠ちゃんが心配そうに言った。どこから話しがもれているかも知れなかった。「向こうさんが力づくでも入ろうとしたら、桐島くんの体力で頑張って時間を稼いでくれ」それから俺がフィルムをカウンターの遠ちゃんに渡す。遠ちゃんはフィルムを隠し、俺は別の観光映画に換える。「どこに隠したらいいでしょうね」「ビニール袋に入れてゴミバケツの奥へ突っこんだら」「そうですね。それなら時間もかかりませんし。それでも、見つかったら」「それ以上は仕方がないさ。あきらめるんだな」俺は鋏を用意した。上映中ならフィルムを切ってしまうければ、すぐにははずせない。更に「エイトクラブ例会」と紙に大きく書いて壁に貼った。「ここまでやっておけば大丈夫だろう」やがて綾子が来た。落着かない遠ちゃんや桐島に較べて綾子はむしろ機嫌が良かった。「ママは落ち着いてますね」遠ちゃんが言う、「あわててもしょうがないでしょう。それに、わたし嬉しいの」「ブルーフィルムが、そんなに嬉しいの

か？」俺が訊く。「いいえ、とんでもございませんわ。これであなたに貸しが出来るでしょう。刑務所へ行くときは一緒に行きましようね」山本もやって来た。彼は、こういう事になると能力の全てを發揮しようと張り切る。かつてに二人の男に次々といろんなことを言いつけて働いた。「何人集るかな」綾子に訊いた。「二十人ほど。だけどカップルもきつと多いから三十人近くになるわね」「座りきれるかな」二人でテーブルの配置を換えた。なんとか入れそうだった。九時をまわると客が入り始めた。どの顔も何度か見たことがあり、俺はこれなら大丈夫だろうと安心した。綾子の言うとおり、たいていは二人連れだった。一緒の女は様々で、若いOL、ホステス、中には自分の女房を連れて来たのもいる。もちろん一人で来るものもいた。店の照明はいつもよりずっと暗くしておいた。ひそひそと話す声は殆ど女で声が浮いている。飲みものを取りながら、なんとなく白いスクリーンに目をやっている。やがて混んで来てママもあらわれた。

十時になった。俺は外へ出て、桐島に注意を怠らないように念を押した。遠ちゃんが残っていた僅かな照明を消した。赤いランタンの灯りだけが、点々と闇の中に浮び、俺はフィルムをスタートさせた。部屋の一角だけが明るくなり、押し殺した声の上を映写機のカチカチという、どこかせわしい安

ぼい音が流れる。最初は、どこかのヤクザが資金稼ぎに作った代物だ。映像も不鮮明なら全体に青みがかって色も悪い。だが、一番手としては、この程度で充分なのだ。国産の不思議なところは、何故かストーリーがあることだ。殊勝にも担当のヤクザは、カメラを手にして突然芸術に目ざめたかのようになり、ストーリーを失わまいとする。が、例外なく類型化し、決局泥棒に入る男と裾を乱して寝ている女か、応診に来た医者と女学生におちついてしまう。この種の映画にうるさい山本は、「あれは音がない所に意味がある。音を入れた方がいいというのは邪道さ。無音で展開するところに見る者を引き込む要素がある」と論評している。

山本の説はともかく、客はスクリーンを見つめている。泥棒が女に襲いかかるところで、ぎこちない演技に笑い声が出たが、後は息を殺している。一本目が終わると、緊張していた空気が緩んで、ざわざわと思いつきの感想をもらした。巻き戻し装填にすこし時間があるので、その間に女たちが飲み物を配ってまわる。遠ちゃんは、目配りを怠らずてきぱきと指示していた。闇の中でフィルムの巻き戻しや装填はやりにくい。俺は低い声で綾子を呼んだ。綾子は近くに居た。懐中電気で手元を照らしてもらい、二本目が始ると、綾子に傍に居て手伝って欲しいと頼んだ。外国製の(殆どアメリカだ)

フィルムは、映像も鮮明で色も申し分ない。自然色より少し赤っぽいだろうか。ただストーリーなど不要といわんばかりに、いきなり本題に入る。小道具や場所に凝り、男一人に女二人が普通だ。画面では黒人の男と白人の女二人がベッドで転んでいる。「白昼の明るさと屈託のない表情が、むしろ白けさせる」というのも山本の説だ。あつと言う小さな声が綾子の口からもれた。客の間からも、すごいわね、と女の安定感を失った言葉がおこる。黒人の男根の大きさに驚いている。女のも大きなあ、と感嘆の声があがる。綾子も俺も壁にもたれて立っていた。俺は綾子の肩に手をまわした。綾子は力の抜けたように寄り沿って来た。電気で映し出された三人は、四角い枠の中で様々な姿を見せて終った。

二本目を巻き取り、ここで少し休息をいれようと思ったとき、ドアが開いて桐島の声が出た。「警官がこちらへ来ます！」客は騒然とした。俺は怒鳴った。「お静かに！どうか落ち着いてください。何でもありません。いつものパトロールです！」客は静まったが、明らかに困惑していた。「大丈夫ですから座っていて下さい。もし入ってきてても皆さんに迷惑のかわらない用意がしてありますから、安心して飲んで下さい」繰り返し言っていると、客は落ち着いてきた。が、俺はその間にフィルムをカウンターに運び、遠ちゃんはビニ

ール袋へ入れてバケツを開いた。外は静かだった。ここで邪魔されてたまるか。俺はなんとしてもスペインへ行く。驚いた綾子が腕にしがみついているのにも気がつかなかった。長い二・三分が経過した。頭の中で警官を説得する言葉を考えていた。今夜は、趣味の八ミリ映画の月例会・・・自慢の作品を持ち寄って等位を競いあう・・・（そのための素人作品も用意してある）・・・。息を止めている時、俺のスペインは最も輝いていた。朝日を受けた教会の十字架が天を指し光っていた。

ドアが開いて再び桐島の声がした。「もう大丈夫です。パトロールで通っただけでした」客の間から笑いが起こった。早速フィルムを受け取ると三本目を映写した。今日のフィルムの中で最も出来のいいものだった。男達は連れの女達の衣類の奥へ手を這わせ始めたらしく、抑えた声や気配が伝わってくる。勝手にやるがいい、それで三万なら安いもんだ。綾子は俺の腕の中で息をはずませている。俺は綾子の顔を起こして唇を重ねた。綾子の腕が俺の首へ巻きつき、俺と綾子は、フィルムが終るまで接吻を繰り返した。

フィルムは四本持っていたが三本でやめることにした。四本目になると間違いなく飽きがくる。映画は終わったが、すぐに明りをつける訳にもいかなかった。五分程経ってからやっ

と部屋の中がわかる程度に照明をいれた。十一時だった。客は連れだつて帰り始め、十分後には全員居なくなった。後片付けをして腰を降すと、俺の体の奥からふうと大きな溜息が出た。

・・・とにかく無事に終った。警察もヤクザも現れなかった。女五人と男四人でテーブルを囲み乾盃した。「どうどうやってくれたわね」ママが笑った。「桜井さんは、どこか変わった人だと思つてたけど、やっぱり変わったことをやりますね」と遠ちゃん。「だけど、もうこれきりよ。さつきお巡りさんが来たときには、心臓が止るかと思つたわ」綾子は本当にもうご免だという顔をした。「何でも一度味をしめると、もう一回もう一回と続けるのが、人間さ」山本が綾子を驚かす。「ぼくも驚きました」と、桐島。「お巡りの一人がね、急に近寄ってきたんですよ、いかにも緊張した顔でぼくをじつと見ながら。ぼくも緊張して力がいりましたよ。なにごとだ、と構えると、小声で『ママに、この間はありがとう、て伝えてくれ』だつて」みんな大笑いした。が、俺ももうご免だと思つた。「絶対にもうやらないよ。遠ちゃん。奥さんが来ていたんじゃないのかい」「ええ。先に帰しました」「あら、そうだったの。どうせ今日はもう店じまいだからお帰りなさいな」ママが遠ちゃんに言った。「遠ちゃん、奥さんが

手ぐすねひいて待つてるぞ。体を大事にしろよ」山本のひやかしに送られて彼は帰った。桐島にも、帰っていいわよと言いながら、ママは山本の腕を取って立ち上った。「山ちゃん、ちよつと話があるからわたしと一緒によ。じゃあ後を頼んだわね」と、まだまだ未練のある山本を引き立てて行った。

後で聞かされたのだが、薄暗い明かりの中で、ママは俺の唇の端についていた紅とその主を見落さなかった。山本は、店を出るとすぐに車で家へ送られた。なんだかさっぱりわからん、とぼやいていた。突然取り残された型になって二人とも驚いたが、俺と綾子は自然に抱き合った。

俺は、はじめて綾子の部屋に泊まった。

月曜日に「青い猫」で収支計算をした。二人が十六組と一人で来たのが五人。全部で百十一万円あった。飲食代として綾子に十万円渡し、遠ちゃんと桐島に五万づつ特別手当を出した。残りの九十一万円を三人で割って、余った一万をフィラムの謝礼として払うことにした。俺の胸に三十万納まった。月給の三ヶ月分に近い。ママには、今夜赤坂で綾子から渡すと電話した。これで完全に終わった。もういつでもスペインへ行けるのだ。俺が飲み始めると、綾子は考えこんでいるようだったが、「わたしのお願いきいてくれる？」と思いつめた

表情で言った。「なんだい?」「きいてくれるって約束して。ね、きいてくれるわね」「……?」「約束したわよ。・・・じあ、わたしの分を受けとつて」と分けたばかりの封筒を俺の前に出した。俺は、受け取れないと言った。綾子は、男が約束したんだから守らなければいけない。自分は店も順調にいつてるし特にこの金が必要ではない、それに三十万ぽっちで事情のわからない国で何か月も暮すことはできない、と言いつ張った。金がなくなれば働く。若い男が選り好みしなければ、どこの国であれ仕事がないはずはない、と俺も頑張った。どうして受け取ってくれないのか、これはもともとあなたのお金なんだから、と綾子は次第に泣き声になってきた。そして最後に、わたしのお金だから嫌なのね、と言って俯いた。肩が震えている。俺は降参する型で妥協案を出した。「じゃ、貸してもらふことにするよ。それならいいだろう」綾子は濡れた顔をあげると笑っていた。「君の涙には、いつもやられるよ」俺が言うと、「だって、か弱い女は、涙と笑顔だけを武器にして人生と闘っているのよ」と手を打って喜んだ。

石造りの壁に純白の光りを踊らせる、陽気な人間達の国は、もう俺の手の届くところにあつた。明日会社へ行ったら辞表を出そう。俺は、初めて長い航海に出る船員のように胸をはずませた。

一か月が経った。その間に旅行社へ行って相談したり、俺
なりの準備は進めた。が、会社が最悪の事態に陥っている時
にやめるのも何となく気がひけたので、辞表を出すことは見
合わせていた。それに金をにぎった途端に顔を見せなくなっ
たと思われたくないので、三・四日に一回程度はママや綾子
に会いに行っていた。要するに以前と同じような生活をして
いた。「ひとつだけ分かったよ」新橋で、山本のいないとき
にママに言った。「そう、『なぞなぞ』とけた？」俺に分かっ
たのは、ポーチは毎日変わっても、必ず小さなピンクの造花
がついてることだ。「そう、やっと気がついてくれた？」「で
も、それと俺となんか関係があるの？」「そうね・・・ある
のか、ないのか。あの造花見て、思いたさない？」「・・・？」
「あれ、リボンで作るのよ。包装用のよくあるテープよ」
「・・・？」

ママの話は、こうだ。初めてその造花に気づいた時、綾子
はなにを考えてるんだと思った。叱り付けて、二三発殴って
やろうとしていた。店には、店の品や格がある。赤坂のクラ
ブのママが、よりにもよって小学生の工作のようなアクセサ
リーをつけてるなんて！！怒りで血が逆流しそうだった。が、
ママにも事情があつて、一日綾子に会うことはできなかった。

一日の時間が冷却期間となった。考えてみれば、綾子だってそれくらいのは分かっている。それでも造花をつけてるのは、なにか訳があるのかも・・・と思う余裕が出てきた。で、考えた・・・ピンクのテープ、大事なテープ・・・。「もう一度きくわ。なにか思いださない?」「もしかして・・・」「そのもしか、よ。」「でも、プレゼントならしよっちゅうもらうだろ。」「プレゼントは、ね。でも、中身をたしかめて手帳に記録したら、そのまま棚積みよ。もう一度見ることもまず無いわ。まして、包装紙やテープなんて」喉がひどく渴いていた。俺は、流し込むようにビールを飲んだ。

「人間ておかしなもんね。というより、勝手なものかな。事情が分かったら、テープの花もかわいくて、まあいいかって気になってきたの。目立たないように小さく作って、ポーチの裏側に来るようにピンではさんでるのよ。なんだかいじらしくて・・・」ママの考えていることが、ようやく理解できた。ピンクのリボンの花は、俺が誕生日にプレゼントをした時のリボンで、綾子は、ちいさな花にしているもポーチにつけている・・・ということだ。俺にしてみれば、思いもよらぬ展開で、なんと返答すればいいのか、言葉が出てこなかった。永い間があつて、「話しがあるつていったのは、そのこと?」「ううん、本題はこれから。ここまでは、ほんの前ぶり。た

だ、そうね・・・全部話すとずいぶんながくなるから・・・」
迷い迷いママが話したことを要約すると、こんな内容だ。綾子も数年のうちに結婚する。もし、二・三年内に結婚しなければ、一生できない可能性が高い。それは、永年同業者を見てきてほぼ断定できる。が、見合ったような相手に出会う機会にめぐまれない、というか皆無の仕事だ。いずれは、すべて綾子に譲るつもりで養女にしたが、結婚相手にこの仕事をやめろといわれるかshれない。結婚するか、しないか、仕事を続けるか、やめるか、その選択をしなければならぬ時点にいま立っている。綾子の出かたによって、ママも身のふりかたを考えなければならぬ。

「ごめんなさいね、ながながと・・・けっきよくグチをきいてもらって・・・」「いや、聞かせてもらって良かったと思うよ・・・、だからと言って、なにもいい考えも浮かばないんで、役に立たないけど。仮に、綾ちゃんが、『結婚できなくてもいいと割り切って店を続ける』のと、『結婚するから、すっぱり仕事をやめる』と、どちらかなら、どっちがいい?」「結婚相手によると思うわ。仮に、仮の話よ。もし相手があなたなら『店なんかいいから、早く結婚しなさい』で、強くすすめるし、『えーっ!』という相手なら、仕事をすすめる・・・と思うわ」俺は、複雑な気分だった。

会社は、この一か月の間に好転の気配が見え始め、俺の仕事もそれなりに忙しくなった。季節感のないこの街でも秋の深くなったことを思わせるある晩、夜中に電話で起こされた。ママだった。異常に興奮していたが、ようやく新橋の病院からかけていることがわかった。真夜中だったから車は楽に走れた。病院の玄関を入ると長い廊下の椅子に、小さなママの姿だけがぼつんとあった。ママはすぐに俺を認めた。蒼白のママの顔には血管さえ透いていた。

こんどは、何をやったんだ！？いつだったか、俺が冗談に「あそこで一分、いや、三十秒寝ていられたら今夜は俺がおごるよ」と、銀座の交差点を指したら、彼は、よしと言うなり飛んでいって交差点の真中でいきなり大の字になった。そのときばかりは、流石に俺も驚いた。たちまちクラクションの大合奏が沸き起こった。運転手の汚い罵声が彼に集中した。交番の警官が何事かと腰をあげ、通行人が立止って注視した。俺はあわてて飛んで行って彼を起こし、腕を引っぱって夢中で逃げた。警官が追ってきたが、人混みと細い路地を心得ている俺達の方が有利だった。ゴミバケツの並んだ一人通るのも狭い路地で、俺達は声をあげて笑った。また、タクシーの止まらないのに怒った彼は、いきなり走っているタクシーに飛びついたことがある。彼は十メートルも引きずられ、服

を裂き手足に傷を負った。この前の新橋での騒動や酔払いとの喧嘩までいれたら、そうした話はいくらでもある。今まで無傷でいたのが不思議だ。

山本は、手術室に入っていた。廊下で待ちながらママに事情を詳しく聞いた。山本とママは新橋の店を終わって赤坂へ向かおうとしていた。店から外へ出たところで、通りかかった男とぶつかった。機嫌の良かった彼は「どうも、すいません」とすぐに謝った。が、相手が悪かった。どうも、てどういうことだと威してきた。地回りのヤクザだった。そこでもう一度謝れば何事もなく済んだのかもしれない。ところが、彼は相手の態度でかっときた。ひとが悪かったと謝っているのに、いい加減にしろと怒鳴った。男は、彼の腕を掴むと暗がりへ引っぱりこんだ。そこで二言三言口論して殴り合いになり、彼は応戦した。そして、相手の男は懐から出したものをいきなり彼の脇腹へ刺すと逃げた。手術が終わった。部屋へ移された山本は眠っていた。大丈夫でしょう、腸を少し傷つけていましたが、不幸中の幸いです。と医者と言った。暫く二人で様子を見ていたが、二人居ても仕方がないからママに帰るように言った。ママは彼の母親の心配をした。「お母さん、心配してないかしら」「彼が外泊するのはめずらしいことじゃないから。おふくろさんには、明るくなってから電

話するよ。年寄りのことだし、彼は大丈夫のようだから」それからママは、取りとめのない話しをして一時間後に帰った。俺はなんとなく山本の顔をのぞいた。激しい癩性を現すように眉間に深いしわが二本縦に走っている。出血したせいか顔は白かった。じっと見ていると、なぜか涙が出そうになった。莫迦なヤツだよ、お前は。ふと俺はロバートを思い出していた。あいつももしかして不自由な野戦病院で寝ているのじゃないだろうか、そんな気がした。長い夜だった。考えてみれば、山本と二人で過した多くの時間の中で、この夜ほど山本を身近に感じたことはなかった。

明るくなって、彼の母親に電話した。どう言ったらショックを与えないで済むだろうかと思いついたが、足に軽い怪我をしましたので、と俺は言った。着いてから本当のことを言おう。

一時間後彼の母親が到着した。「あの子が怪我をしたんですか」気丈夫な母親は普段と同じに見えたが、話しをするとやはり興奮していた。「ええ、怪我は大したことないようです。ただ本当は足じゃないんですけども。手術も終わって先生も大丈夫だと言ってますから」「本当に大丈夫なんですか」「大丈夫です。そんなに心配なさるほどの怪我じゃありません。ちょっと腹を傷つけたんです……」病室へ入ると、

彼はまだ眠っていた。ベッドの傍へかけさせると、母親は、息子の顔を心配そうに見ていたが、やがて話し始めた。「この子は、かわいそうな子でしてね……」

彼の父親は、以前彼から聞いたことがあるが、職業軍人だった。一度彼の家で軍刀をさげ陸軍少佐の階級章をつけた写真を見たことがある。外国の大使館付武官も勤めたが、太平洋戦争で南方で戦死した。古い家柄を誇る家系の多くがそうであるように、彼の家も終戦と共に没落した。長い廊下の続く大きな家も、人にかしずかれる生活もそこで失った。…母親は行商に出歩き、彼は一日を殆ど一人で暮した。兄が一人あるが、遊び盛りで家になどいない。「ほんとうは淋しかったんだろうと思います。そんな素振りは見せませんでした、淋しくないはずはありません。それまで面倒見てくれた女中や下男も居なくなり、それどころか母親のわたしさえかまっていられなかつたんですから」孤独な彼の少年時代とそれを哀れむ母親の姿は、彼と母親の精神的な深いつながりを感じさせた。彼の特異な性格も、そうした過去が形成したものなのかと思いつつ俺は聞いていた。

事件はもう一つあった。息子の過去を話しおえた母は、「それに、今日は大事な日なんです。昨日も出かけるときに明日のことを忘れないで絶対まっすぐ帰ってくるんですよ、と

あれほど言ったのに「彼の母親は、彼の結婚相手を自分で見つけていた。ところが、彼が自分で勝手に捜してきてそちらは立ち消えかかっていたのだが、破談になると再び故郷の親戚へ連絡をとり、すぐに上京させる手はずを整えた。彼の母親が態度を硬化させた理由が、わかったような気がした。その相手が今日上野へ着くことになっている。どうしたらいいんでしよう、と母親は迷っていた。相談の結果俺がここにいて、相手を知っている母親が迎えに行くことにした。

母親が恐縮しながら出て行くと、俺は会社に休暇の電話をし、山本の勤務先にも状態の説明をした。それから一時間経った頃、彼が小さなうなり声をあげた。俺は声をかけてみた。二三回呼ぶとぽっと目を開いた。暫くは、自分の置かれた境遇を理解できないようだったが、やがて全てを納得した。「大丈夫か。痛まないか」俺が訊くと、ああ、と答えて頭を振った。ママが救急車でここへ運んでくれたこと、彼の母親が来て上野へ行ったことなどを話してやると黙って聞いていた。「今日見合いの相手が上京するんだって」なぜ隠していた、写真は見たのか、美人か、と俺が訊く間、彼は無言でじつと天井の一点を見ていたが、ぽつりと一言いった。「スペインへ行くんだって」俺は思わず彼を見つめた。「知ってたのか。別に隠しておくつもりじゃなかったんだけど」言いながら自

分でも弁解がましく聞こえた。

「いや、せめてる訳じゃないんだよ」彼は話し始めた。「最初話しを聞いたときは、俺も一緒だと思っていたんだよ。俺たちいままで何でも一緒にやってきたもんな。だけど、どうもお前は一人で行くつもりらしいと判った時は、正直言ってみて面白くなかったよ。いや、理解できなかったくらいだよ。銀座でバーテンが気にいらないと殴った時も、たまには世間並みのことしようやと、東北へ旅行したときも、なにもかも一緒だったじゃないか、それなのになぜだ、と思った。だけど考えているうちに変わってきたんだよ。・・・俺達が通過しようとしている若さという奴は、やっかいなもんさ。人生で一番大きい賭をしようとするのに、する気も充分あるのに肝心の切り札が無いんだよ。なぜか切り札はいでも敵が持っているやがるんだ。一度もこちらへは回ってこない。つらいもんだよ、切り札なしで賭けをするのは。だから焦って勝負に出て、いつも負けてしまう。負けて当然なのに、余計に大きな勝負をしようとする。切り札が一枚あれば。決して過大な望みを持っている訳じゃない、たった一枚あればそれでいいのに。他人の切り札を見ると、家庭だとかほんの少しの社会的地位だとか、貧相なものばかりなのに、それでもなんとか勝負になっている。そんな切り札に負けているのかと思うと自分が

哀れになってくる…」山本はそこで目を閉じた。顔色が冴えないせいかいつもの山本とは別人に見えた。「俺は決めたんだよ。もう分別する年だから、家庭という小さな切り札を抱えて後生大事に生きていくよ。お前はスペインへ行くのがやはりいいと思う」二人の間に長い沈黙があった。晩秋の白い光りが、静かに移動していった。それから、俺は彼に訊いた。「今日来る人と結婚するつもりか」「いや、そんなことは決めてない。俺にだって選ぶ権利はある」そう言って笑い出したが、いてて…と腹をおさえた。俺も笑って、さすってやった。午前中に警察が事情聴取に来た。午後になって、ようやく彼の母親が頬を少し染めた大人しそうな女とその母親を伴って現われた。もう用無しだ。挨拶をかわして俺は退散した。

それから仕事の後には病院を訪れた。一度は見舞いに来た綾子と一緒に、そのまま赤坂へも行った。彼が入院してから五日目の夜、俺が病室を訪ずれると丁度彼の見合いの相手が帰るところだった。座りながら「あの子に決めたのか」言う、「ああ、決めたよ」と答えて、「ところで、スペインへは何時たつんだ」と訊いた。「スペインは、やめた」と、俺は自分でも驚いたくらいあっさりと言葉が出て来た。「やめた？行かないのか？」「うん、それで一つ頼みがあるんだ

が」「なんだい?」「行かないとすると六十万がそのまま残るんだよ。俺たちの間で綺麗ごとを言ってもはじまらないからはつきり言うけど、結婚は金がかかるぞ、都合はつくのか」「いや、正直どうしようかと思ってる」「じゃ使ってくれ。

六十万で飲み代払って、多少は資金の足しになるだろう」「そうはいかない。あれはお前の金だ。それにまさか俺のために行かないと決めた訳じゃないだろうな」「いや、絶対にお前のためじゃないよ。自分の考えていたことが、ようやくわかったんだ。いまから考えてみると、金が入ったときから既にスペインなんかどうでもよくなっていったんだ。俺は何かしていかっただけなんだよ。それがこの前、お前の話を聞いているうちにだんだんはつきりしてきたんだ。つまり俺のやりたかったことは、ブルーフィルムが終わったときに終わっていたんだよ。スペインは、自分で作りあげた口実にすぎなかったんだ。そう思いついたとき、何もかもはつきりしたような気がしたのさ。そうだとすると、あの金の処置にむしろ困る。皆なを協力させた金で遊び歩くほど、俺も悪人じゃない。金はそのまま持っているは、スペインへは行かないはじゃ、ママや綾子に会わず顔がないよ。要するにあれは誰の金でもないんだ。だから使ってくれよ」「そうか、本当にいまの話しに嘘はないな」「絶対はない」「よし、じゃ使わせてもらおう。

助かるよ」

俺は立ちあがって窓から外の景色を見た。相かわらず暗い夜だった。そして、その夜の奥に消えていく光り輝く白い街を見た。「なんだか、青春は終わったという気がするな」俺は外に顔を向けたまま言った。山本は、「そうだな、本当に傷だらけの青春だったな」と、大声で笑った。

窓ガラスの向こうに、綾子の笑顔が明るく映えていた。

〔完〕

感想メールを送ってください。

今後の参考やエネルギーにさせていただきます。

DBL(埋蔵文学発掘)会